

主 題：虐げられし者の祈り

聖書箇所：詩篇 17 篇

テーマ：信仰ゆえに迫害を受け、虐げられる時にどんな神様を覚えて祈るのか

今朝、皆さんとともに学びたいみことば、詩篇 17 篇をお読みしたいと思います。

詩篇 37 篇 ダビデの祈り

「:1 【主】よ。聞いてください、正しい訴えを。耳に留めてください、私の叫びを。耳に入れてください、欺きのくちびるからでない私の祈りを。:2 私のためのさばきが御前から出て、公正に御目が注がれますように。:3 あなたは私の心を調べ、夜、私を問いただされました。あなたは私をためされましたが、何も見つけ出されません。私は、口のあやまちをしまいと心がけました。:4 人としての行いについては、あなたのくちびることばによりました。私は無法な者の道を選びました。:5 私の歩みは、あなたの道を堅く守り、私の足はよろけませんでした。:6 神よ。私はあなたを呼び求めました。あなたは私に答えてくださるからです。耳を傾けて、私の申し上げることを聞いてください。:7 あなたの奇しい恵みをお示してください。立ち向かう者から身を避けて右の手に来る者を救う方。:8 私を、ひとみのように見守り、御翼の陰に私をかくまってください。:9 私を襲う悪者から。私を取り巻く貪欲な敵から。:10 彼らは、鈍い心を堅く閉ざし、その口をもって高慢に語ります。:11 彼らは、あとをつけて来て、今、私たちを取り囲みました。彼らは目をすえて、私たちを地に投げ倒そうとしています。:12 彼は、あたかも、引き裂こうとねらっている獅子、待ち伏せしている若い獅子のようです。:13 【主】よ。立ち上がってください。彼に立ち向かい、彼を打ちのめしてください。あなたの剣で、悪者から私のたましいを助け出してください。:14 【主】よ。人々から、あなたの御手で。相続分がこの世のいのちであるこの世の人々から。彼らの腹は、あなたの宝で満たされ、彼らは、子どもらに満ち足り、その豊かさを、その幼子らに残します。:15 しかし、私は、正しい訴えで、御顔を仰ぎ見、目ざめるとき、あなたの御姿に満ち足りるでしょう。」

さて、きょう私たちがこの時間一緒に学びたいことは、今読んだ詩篇の表題にもあったように祈りについてです。私たちはこれまでもさまざまな場面で祈りを捧げているダビデの姿を見てきたのですが、詩篇 150 篇を通して“ダビデの祈り”という表題が付けられているのは、ここと 86 篇の二つだけになります。残念ながらどうしてこの二つだけにそのようなタイトルが付けられていたのかについてはよくわかってはいません。でも一つははっきり言えることは、この詩篇を見れば、主の心にかなう歩みをした人物が一体どのように主に祈っていたのかということを知ることができるということです。そしてそれは今の私たちにとってもとても大切なこととなります。なぜなら私たちが自分自身の歩みを振り返ってみれば、祈ることに関して時に難しさを覚えることがあるからです。皆さんは一体どんな時に祈ることにおいて難しさを感じるのでしょうか？もちろんそれぞれにいろいろな考えがあると思います。でも恐らく多くの人にとって困難を感じるのは、苦しみや痛みを味わっている時ではないでしょうか？頭では神様こそが自分のすべてを委ねることができるお方だとわかっていても、恐れや不安、怒りや悲しみといったものが自分の心を支配しそうになる時に、私たちは一体どのように祈っているのでしょうか？また、神様はすべてのことを支配されていると信じていても、経験している痛みがますます増し加わって一向に改善する兆しが見えないように感じる時、私たちはどのように祈っているのでしょうか？もし私たちが味わっている苦しみが自分が何か過ちを犯したからではなく、ただキリストに対する信仰ゆえに人からありもしないことで責められたり、悪口を言われて傷つけられたり、そんなことを経験する時に私たちはどのように祈っているのでしょうか？そして最後に、神様に忠実に従っていくことがそのまま自身の死を意味するような、すぐそこまで死が迫っているような場面に直面したとすれば、主に忠実に従

うことがあり得ないほど大きな犠牲を伴うことを目の当たりにしたとすれば、私たちはどのように祈り続けているのでしょうか？確かに自分たちの歩みを振り返ってみれば、いろいろな場面で祈ることに難しさを覚えることがあると思います。

でもきょう私たちが見るこの詩篇17篇を通して、ダビデは私たちにあることを教えてくれています。それはどんな苦しみであろうとも、もっと言えば信仰ゆえに迫害を受け、死が間近に迫る中であつたとしても、私たちは祈り続けることができるということです。ダビデは自身の経験を通して、私たちに祈ることのすばらしさを教えてくれました。私たちもそのような者として成長していくことが彼のその模範から見て取ることができるのです。この17篇を記した時、ダビデが具体的にどのような苦しみに遭っていたのかについては私たちはよくわかってはいません。しかし、17篇の中で彼は何度も何度も主を呼び求めていますし、彼の敵が彼を取り囲んでいることを何度も教えていました。彼は非常に大きな苦しみの中にいました。ありもしない罪を責められて、本来受ける必要もないような苦痛を味わっていました。信仰ゆえに敵に虐げられて、彼には死の危険までもが迫っていました。そんなひどい苦しみの中にいた彼がしたことが祈るということでした。

考えてみれば、かつての信仰者たちも同じような歩みをしていたことを私たちはよく知っています。例えばピリピの街にやって来たパウロとシラスもそうでしょう。彼らはみことばを忠実に語って、主に対してどんな時も仕えようとしました。そしてその結果、彼らは捕えられ何度も鞭打たれた後に牢屋に閉じ込められました。彼らはいつ自分たちがその牢から出ることができるのかはわかりませんでした。もしかしたら自分たちはそこで死を迎えるかもしれない、そんな状況の中に彼らは置かれていたのです。そんな彼らがそこで何をしていたのかというと、使徒16：25に「真夜中ごろ、パウロとシラスが神に祈りつつ賛美の歌を歌っていると、ほかの囚人たちも聞き入っていた。」と記されています。彼らがしたことは、自分たちの境遇を嘆くことではなく、主に祈ることでした。私たちがこのような例を見る時に、どうして彼らは絶望してもおかしくないような状況の中であって、喜びを失うことがなかったのでしょうか？どうして彼らは命の危険が間近に迫り、希望さえ見えない中で祈り続けることができたのでしょうか？それは彼らが自分たちの信じる神様がどのようなお方かということをよくわかっていたからでした。彼らはさまざまな苦しみの状況の中であって、自分の愛する神様がどんな存在かということを知っていたのです。

○虐げられし者の祈り：神の三つの姿

これは私たちの祈りの生活においてとても大事なことになります。私たちが神様を個人的にどれほど深く知っているかということが、私たちが置かれるさまざまな状況の中であって、どのように振る舞うのか、どのようにその状況に応答するのか、どのようにその中で祈るのかということについて多大な影響を与えるからです。では敵に虐げられていたダビデはどんな神様を覚えようとしていたのでしょうか？彼を揺るがすことのなかった神様というのはどのような存在だったのでしょうか？ダビデは17篇での祈りの中で、私たちに神様の三つの姿を教えてくれています。どんな苦しみの中でもダビデは変わらずに、三つの神様の姿を覚え、この方を見上げていました。早速一つずつ見ていきましょう。

1. 神様が公正な審判者であることを覚えること 1-5節

まず、敵から虐げられていたダビデが覚えた神様の姿の一つ目は、神様が公正な審判者であるということでした。敵からひどい迫害を受けて苦しんでいた彼は、まず何よりも正しいさばきを下さる公正な審判者に助けを求めています。彼は1-2節で「【主】よ。聞いてください、正しい訴えを。耳に留めてください、私の叫びを。耳に入れてください、欺きのくちびるからでない私の祈りを。私のためのさばきが御前から出て、公正に御目が注がれますように。」と祈り始めました。ダビデはここで繰り返し自分の無実さを神様の前に訴えていました。「聞いてください、正しい訴えを……耳に入れてください、欺きのくちびるからでない私の祈りを……公正に御目が注がれますように」と。ダビデは敵が自分についてさまざまな

うわさや偽りを流して傷つけようとしていることをよくわかっていました。ありもしないうわさや嘘が周りで出回っていて、彼はそれによって非常に苦しめられていました。だからこそ彼は神様に叫ぶのです。「【主】よ」、私の叫びを聞いてください。私の訴えに耳を傾けてください、偽りの口をもって話している者たちのことばを聞き入れないでください、彼らの証言は間違ってるからです、私は無実です、どうか公正な目をもって正しい判断を下してくださいと。ダビデの祈りは正直なものでした。また彼の祈りはいつもどんな状況にあっても変わらずに神様に目を向けたものでした。

これはもう何度も見ていることですが、私たちがいつもどこに心を向け、いつもどこに自分の目を向けているのかということは、私たちの歩みにとって非常に大切なことです。なぜかという、それはもし私たちが人に責められたり、心に苦しみを味わう時に、その問題の解決策を自分自身のうちであったり、神様以外のものに見出そうとすれば大きな問題が起こるからです。神様以外のものを見始めてしまえば、私たちの土台は容易に揺らいでしまいます。ありもしないいろいろなうわさが流れていることに目が取られ、そこに耳が取られてしまえば、心が奪われてしまえば、ざわついて喜びや平安を失ってしまうかもしれません。また自分を非難するような声に目が向いてしまえば、その声に圧倒されてしまったり、それらから傷つきたくないという思いが、自分を責める人々に対して過剰に反応するといった行為を生み出すかもしれません。自分を訴えている人たちを憎んでしまったり、直接その人に言い返すことができないからといって代わりに陰でその人のうわさ話を流して仕返しをしようと考えてしまうことがあります。私たちがどこに心を向け続けているのかということは、私たちの振る舞いに大きな影響を与えます。私たちが覚えておくべきことは、私たちはいつも公正な審判者のうちにすべてを委ねることができるということです。自分たちの感情や気持ちに目を向けるのではありません。自分たちが復讐するのでもありません。箴言 20 : 22 でも「**悪に報いてやろう**」と**言うてはならない**。**【主】を待ち望め。主があなたを救われる。**」と**言うて**いました。私たちに必要な助けはこの方から来ます。この方がいつも正しいことを成し遂げられるのです。だとすれば私たちはこの方を祈り求めることです。この方に心を留め続けることです。ダビデは主が公正な審判者であることをよく知っていました。

でも同時に、自分自身が無実なのだということにも彼は確信を持っていました。だからこそ彼は神様に対して公正にさばいてくださいと大胆に祈ることができました。もちろんここで勘違いしてほしくないことは、ダビデはこの箇所において自分のうちにはいっさい罪がない、完璧な人間だということを言わんとしているのではないということです。その証拠に、詩篇を見れば、さまざまところで罪の告白をしている彼の姿を見て取ることができます。ダビデは自分が罪人であることをだれよりもわかっていました。皆さんもよく知っている詩篇 32 : 5 でも彼の告白を見ることができます。「**私は、自分の罪を、あなたに知らせ、私の咎を隠しませんでした。私は申しました。「私のそむきの罪を【主】に告白しよう。」**すると、**あなたは私の罪のとがめを赦されました。**」と。彼は自分自身のうちに罪があることをよくわかっていました。でも彼は自分は無実だと主に大胆に言ったのです。では一体どういう意味で彼は自分の訴えが正しいと言っていたのでしょうか？彼はただプライドにあふれていたのでしょうか？もちろんそうではありませんでした。彼がここで言わんとしたことは、彼の敵が今自分を責め立てているその特定の罪に対して自分は無実なのだ**と**考えていた**ということ**です。ダビデは自分自身のうちをよく吟味しました。そして自分を責め立てている者たちが指摘しているような特定の罪、特定の訴えに対して、いや、それは私には値しません、彼らが言っていることは間違っていますと、その扱いが不当なものなのだ**ということ**に確信を持っていたのです。

しかし同時に、彼のこの主張は単に彼からだけ来たものではありませんでした。私は無実ですと彼だけが言っていたのではなかったのです。その証拠に 3 節以降を見れば、自分だけではなくて主ご自身が彼のうちをよくご存じなのだ**ということ**をダビデは続けて教えています。まず 3 節に「**あなたは私の心を**

調べ、夜、私を問いただされました。あなたは私をためされましたが、何も見つけ出されません。私は、口のあやまちをしまいと心がけました。」とありました。

●三つのことば：

ここで皆さんに注目してほしい三つのことばがあります。

a) 心

一つ目に神様がダビデの「心を調べ」られたということです。聖書を見る時に私たちがよく知っていることは、聖書は繰り返し神様が人の外側の振る舞いだけを見るお方ではなくて、人の考えや人の願い、人の感情のすべてに至るまで内側をご覧になられるお方だと教えているということです。Iサムエル16：7はまさにそう言ってました。「しかし【主】はサムエルに仰せられた。「彼の容貌や、背の高さを見てはならない。わたしは彼を退けている。人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、【主】は心を見る。」」と。神様はダビデの外側だけ、彼の振る舞いだけを見られたのではありませんでした。神様はダビデの心のうちをご覧になったのです。そして彼のうちに責められる部分があるかないかをよく調べられたのです。

b) 夜

また次に、神様がその後で「夜、私を問いただされました。」と彼は言っていました。この「夜」という時間帯は人が最もひとりになる時間、だれにも見られない暗闇に包まれた「夜」、周りにほかのだれもいないような時に神様はダビデのもとを訪れて、彼がどのような歩みをしているのかをお調べになったということです。神様はダビデのことをよくご存じでした。彼が人前で何をしているのかだけではなくて、「夜」、彼がひとりになった時にどのような心を持っているのかということに関しても神様はご覧になったのだと。

c) ためされた

そして三つ目に「あなたは私をためされましたが」と出てきました。神様がダビデを「ためされ」ということです。以前見た12：6にもこのことばは用いられていました。そこでは「【主】のみことばは混じりけのないことば。土の炉で七回もためされて、純化された銀。」と使われています。では神様がダビデを「ためされ」というのはどういうことかということ、それはまるで銀の内側にある不純物が何度も何度も熱によって精錬され、取り除かれていくかのように、神様は入念に彼のうちにとがめられる部分がないか調べられたということです。神様はダビデのすべてを調べられました。外側の振る舞いだけではなく、内側のことも。彼が人前にいる時だけではなく、彼がひとりである時も。入念に、何度も何度も神様は彼を調べられたのです。その結果がその後「何も見つけ出されません」と続いていました。ダビデは神様、私は自分自身の心を自分で吟味しました。そして私には敵たちが言っていることに値するような過ちはありません。でもそれは私だけが言っているのではなくて、あなたが私の心をご覧になられ、あなたはもう私の心がどのようなものか知っておられますと。私は敵から責められるようなことはいっさいしていません、あなたがそれをご存じです、そうダビデは確信したのです。

また、それ以降でも彼はこのように付け加えていました。3節の続きから5節を見てください。「私は、口のあやまちをしまいと心がけました。人としての行いについては、あなたのくちびるのことばによりました。私は無法な者の道を避けました。私の歩みは、あなたの道を堅く守り、私の足はよろけません。」とあります。言いかえれば、彼は話すことばにおいても、振る舞いにおいても、だれにも非難されるところがない者であることを心がけていたということです。ダビデはいつも神様のみことばに立とうとしていました。神様の唇のことばに、聖書に、みことばに立って、そして神様の道を堅く守っていたのです。周りのものに左右されて罪に走ってしまうのではなくて、神様の喜ばれるその道をただ歩み続けていました。だからこそ彼はひどい苦しみを味わい、心が揺り動かされて仕方のないような激しい迫害の中であってさえ、その足がよろけることはなかったのです。ダビデはこのような態度をもって祈りを捧

げていました。彼は自分が心を吟味した時に、私のうちには敵から責められることがないということに確信を覚えていました。また、神様自身が私をご覧になった時に、神様も私のうちに責められるところがないことの確信を持っていました。そのような確信を持っていたからこそ彼は神様に対して大胆に公正な審判を下してくださいと祈ったのです。私は正しいから、私は無実だから正しい判断を下してくださいと。

ここで皆さん少し考えてみてください。私たちは今、このダビデと同じような祈りを捧げることができるでしょうか？ダビデと同じように、私たちは心を吟味しているのでしょうか？私たちの祈りが、聖く正しいその審判者に対して捧げているということを私たちはどれほど真剣に考えているのでしょうか？私たちが覚えておかなければいけないことは、私たちの主は私たちの振る舞いだけではなく、心を見られるお方だということです。私たちは幾らでも人の目を欺くことはできます。でも神様の目を欺くことは絶対にできません。この主は私たちが人前でどのようなことをしているのかだけではなく、夜ひとりである時でさえ、だれもない時でさえ私たちをご覧になっているのです。ほかのだれが見ていなかったとしても、この方はいつも私たちの外側も内側もすべてご覧になっているのです。だとすれば、今、自分自身の心を見る時に、主の前に告白して悔い改めなければならない罪を持ち続けてはいないでしょうか？間違っているとわかっていながら、そのままよしとしているものはないでしょうか？もしだれかが見た時に、だれかが聞いた時に、絶対にそんなことはしないということを隠れて行ったりしていないでしょうか？まただれかが聞けば驚くような思いをだれかに対して抱き続けてはいないでしょうか？

思い返してみれば、ダビデは繰り返し詩篇の中でこのように祈っていました。主よ、私を調べ、私を試みてください。私の思いと私の心をためてください。主が自分のうちを正しくご覧になってくださることを彼は願っていました。果たして私たちは今そのように祈ることができるでしょうか？主よ、私の心をご覧ください、そのように言えるでしょうか？それとも神様、私たちのうちには確かに罪はたくさんあります、今は私のうちは見ないでくださいと。でも感謝なことに、みことばは私たちがその自分の罪を悔い改める、言い表すのであれば、神様はその罪を赦してきよめてくださるという約束を与えてくださっています。だとすれば、私たちは自分の心を正しく吟味することです。私たちは聖い神様の前を生きていることを覚え続けることです。そしてもし私たちのうちに罪があるのであれば、それを悔い改めて主の赦しをいただきながら歩み続けることです。

迫害に遭い、虐げられていたダビデは、神様が公正な審判者であるということを知っていました。そしてこの方が自分のことを知ってくださっているからこそ、自分の叫びを聞き入れてくださいと求めたのです。彼は自分自身が無実だということに確信を持っていました。だからこそこの方が正しい審判を、正しいさばきを下されることを願ったのです。私たちも同じ主を覚えることができます。私たちの外側も内側もすべてををご覧になってくださっている神様は、私たちの必要も見てくださっているのです。私たちが苦しみの中にある時に、たとえ私たちが理不尽なもので苦しんでいたとしても、この方は必ず正しい審判を下してくださいます。この方に私たちは身を委ねることができるのです。

2. 神様があわれみ深い助け主であることを覚えること 6-12節

また、二つ目に敵から虐げられていたダビデが覚えた神様の姿は、神様があわれみ深い助け主であるということです。ダビデは6-7節で「神よ。私はあなたを呼び求めました。あなたは私に答えてくださるからです。耳を傾けて、私の申し上げることを聞いてください。あなたの奇しい恵みをお示しください。立ち向かう者から身を避けて右の手に来る者を救う方。」と主を呼び求めています。ひどい苦しみに遭っていたダビデはまず彼の置かれている状況を正しく判断し、さばきを下してくださるその審判者である方に委ねました。しかし同時にここでは主が「奇しい恵み」を示してくださるようにと願ったのです。言うまでもなくダビデが置かれていた状況は絶望的なものでした。しかし、そんなどうしようもないような状況の中で彼はどこに希望を見出すことができるのかをよくわかっていました。そしてその希望こそが主の

恵みだったのです。この「奇しい恵み」ということばは何回か見ましたけれども、このことばは主との契約であったり、またその契約に対する主の誠実さを表すために、聖書で頻繁に用いられています。ダビデはこの主の誠実さというものをよくわかっていました。ダビデはかつて自分を王にするという契約を結んでくださった神様がただ約束を交わされただけではなくて、その約束を必ず守られるお方であることを覚え続けていました。またこの方が苦しみの中であろうとも、自分を見捨てることなく、変わらぬ愛とあわれみを持って自分に助けを与えてくださることに信頼したのです。だから彼はこう言うことができたのです。神様、あなたは誠実で変わりません。だからこそ私のことばに必ず答えてくださいますと。今私はそんなあなたのもとに身を避けます、だからどうかあなたのあわれみを私に示してくださいと。

また、7節を読んだ時に気づかれた方もおられるかもしれませんが、ダビデはここで、主が「立ち向かう者から身を避けて右の手に来る者を救う方」と書いています。「右の手」という表現を用いれば、神様の持つておられる力とか権威を表しています。神様の偉大な力を表すために使うことばです。同時に、先週のことを思い出してみてください。先週、私たちが見た詩篇16篇の最後のところで、主の「右には、楽しみがとこしえに」あるのだとダビデは記していました。つまり主に信頼して、この方に身を避ける者には主の力強い守りがある。でもそれだけではなくて、そこにはあふれんばかりの喜びや平安が用意されているということをダビデはよくわかってました。だからこそ彼はだれの助けも期待できないような危機的な状況の中であって、ほかのどこにも目を向けるのではなく、ただ主を見上げていたのです。この方だけが私に必要なあわれみを示してくださる、この方のあわれみだけが私にとって十分なのだ

と。

また、彼は続けてその主の守りについて8節で二つの比喩を用いて説明を加えてくれていました。8節「私を、ひとみのように見守り、御翼の陰に私をかくまってください。」と言いました。ここでダビデが言わんとしたことは非常にシンプルです。まず、「ひとみのように見守り」とあります。私たちのからだの中で最も繊細で、最も敏感な部位と言えど何を思い浮かべられるでしょうか？もちろん人それぞれ違うかもしれませんが、でも一つ言えることは、私たちの目というものは非常に敏感なものだということです。例えば何かゴミが飛んできた時に、またほんの小さなほこりが飛んで来た時でさえ私たちは無意識のうちに瞬きしてそれらが目に入るのを防ごうとします。目というものは非常に大切なものだからこそ守ろうとするのです。そのことと比較して、ダビデは神様に「ひとみのように見守」ってくださいと言いました。つまり神様がいつも自分に注意を払ってくださって、敵や危険が現れればすぐに守ってくださるようにと求めています。

次に「御翼の陰に私をかくまってください」と言いました。これも今と同じような意味です。少し想像してみてください。敵や危険が迫ってきた時に、ひな鳥は親鳥の羽の下に身を寄せようとしています。そうすればひなはただ安心して身を休めることができるだけではなくて、親が代わりに迫ってきた危険を追い返してくれると信頼を置くことができるのです。同じようにダビデは、周りを敵が囲む中であって、主がその「御翼」で自分を守ってくださることを求めています。彼はこの方の「御翼」のもとに身を委ねたのです。彼に代わって、神様が敵を退けてくださることを期待したのです。ダビデは自分を救い出すことのできるその助け主がどのようなお方なのかをよくわかっていました。そして自分の置かれている状況を見た時に、この神様の恵みにしか必要な救いを与える力はないということを確認していました。

そして9-12節で、彼は実際にどのような敵に追い詰められていたのかということに関しても教えてください。「私を襲う悪者から。私を取り巻く貪欲な敵から。彼らは、鈍い心を堅く閉ざし、その口をもって高慢に語ります。彼らは、あとをつけて来て、今、私たちを取り囲みました。彼らは目をすえて、私たちを地に投げ倒そうとしています。彼は、あたかも、引き裂こうとねらっている獅子、待ち伏せしている若い獅子のよう

です。」と。ダビデは彼の命を狙う貪欲な悪者たちによって取り囲まれていました。ここで特に10節に出ていた「彼らは、鈍い心を堅く閉ざす者」とあります。この「鈍い心」ということばは直訳すると、「太っている」とか「肥えている」という意味に直すことができます。太っている心、これはダビデの敵の心は自分自身のことに向いているがゆえに、神様や周りの人たちに対して鈍く無関心になっているということです。敵の関心は自分のことにありました。周りのことなどどうでもよかったのです。イザヤ6：10でもこのことばはこのように用いられていました。「この民の心を肥え鈍らせ、その耳を遠くし、その目を堅く閉ざせ。自分の目で見ず、自分の耳で聞かず、自分の心で悟らず、立ち返っていやされることのないように。」と。要するにダビデの敵の関心は周りのものではなくて、常に自分のことにありました。彼らは自分が成功したり、富を得て栄えることを求める。自身を肥やすことが彼らにとって何よりも喜びだったのです。そして彼らが自分のことだけを追い求めた結果、彼らの心は太ってしまい、自分以外のものが見えなくなったり、周りの声も彼らの心には届かなくなってしまったのです。彼らは主に従うことよりも自分の欲望に従うことを望んでいました。人にあわれみを示すことよりも自分の益のためであれば人を蹴落とそうとすることもいとわなかったのです。彼らの関心がいつも自分に向いていたからこそ、この者たちの語ることばは当然高慢にあふれたものでもありました。

ダビデは無慈悲で容赦もない者たちによってその身をねらわれていました。ただ彼を引き裂こうといのちをねらっている凶暴な獅子のような者たちに後を追われて、彼らに取り囲まれていたのです。間違いなくダビデは助けを必要としていました。今すぐにでも彼は助けを必要としていました。しかし、そんな状況の中であって、彼はなお確信を持ってこう叫んでいました。主よ、聞いてください、耳に留めてください、耳に入れてくださいと。「神よ。私はあなたを呼び求めました。あなたは私に答えてくださるからです。」「私を、ひとみのように見守り、御翼の陰に私をかくまってください。」と。ダビデは自分の愛する神様がどのようなお方かをよく知っていました。神様があわれみ深い助け主であることをよく覚えていました。彼の状況は確かにそんな悲惨なものでした。今すぐに助けを必要とするようなものでした。でもどんな状況にあったとしても、決して変わることはないこの主のあわれみに彼は信頼したのです。

感謝なことは、今の私たちも、ダビデが信頼を置いていたこの神様に同じ守りを見出すことができるということです。確かにそれぞれの生活の中であって、歩みにおいてさまざまな難しさや苦しみを経験するでしょう。信仰ゆえに嫌がらせを受けたり、傷つけられることも多々あるかもしれません。ありもしないことで責められたり、どこにも助けを見出すことができないような場面に直面するかもしれません。心を騒がせてしまったり、恐れや不安を抱いてしまったり、いつまでたってもよくなるように感じる状況の中で、喜びを失ってしまうかもしれません。神様は自分の置かれているその状況をご覧になっておられるのかと涙する時もあるかもしれません。でも私たちは、私たち自身や周りの状況がどうあろうとも決して変わらないものがあるということを思い出すことができます。それは私たちにあわれみをもって必要な助けを与えてくださる神様がおられるということです。そんな助け主が私たちといてくださるということです。私たちはどんな状況にあったとしても、決して変わることはない力強い守りや喜び、平安というものをこの方のうちに見出すことができるのです。

3. 神様が満足の源であることを覚えること 13-15節

そして最後、敵から虐げられていたダビデが覚えた神様の三つ目の姿は、神様が満足の源であることでした。ダビデは自分のいのちを脅かしている敵がどんな存在なのかということを説明した後で、主にこのように願っていました。13節に「【主】よ。立ち上がってください。彼に立ち向かい、彼を打ちのめしてください。あなたの剣で、悪者から私のたましいを助け出してください。」とありました。ダビデは主が自分の祈りを聞いてくださり、立ち上がって自分の敵を打ち破ってくださることを求めています。しかし、ここでも見て取ることができるように、彼は私の剣でとは言わずに「あなたの剣で」悪者から助け

出してくださいと口にしていたということです。ダビデはいのちをねらわれていました。非常に深く傷ついていました。そんな中であっても、彼は自分の力でやり返そうとはしなかったということです。彼の信頼には限度というものはありませんでした。ここまではあなたに委ねて我慢するけれども、これ以上は自分がやり返しますね、彼はそう言わなかったのです。彼は最初から最後まで、すべて主の御手に委ねていました。復讐と報いとが自分のものではなく、神様のものであることを彼はよくわかっていました。この方が正しい審判を下して下さる方だということを信じていました。

また彼は続けて14節で「【主】よ。人々から、あなたの御手で。相続分がこの世のいのちであるこの世の人々から。彼らの腹は、あなたの宝で満たされ、彼らは、子どもらに満ち足り、その豊かさを、その幼子らに残します。」と言います。一体ダビデはここで何を言わんとしたのでしょうか。先ほども見たように、ダビデの敵たちにとって、この世が彼らの相続分でした。つまり彼らはこの世のことにしか関心を払わないのです。彼らは自分に与えられたいのちを、この世のはかない楽しみのためだけに用いて、また本来であればそのいのちであったり、すべてのものが神様から与えられているのにも関わらず、神様に感謝を捧げようとしません。彼らは自分を満たして下さっている神様に目を向けるのではなく、いつもこの世のものに目を向け、そして自分の子孫にその豊かさを残すことだけを考えているのです。彼らの頭にはこの世で一時的な満足を見出すことしかありませんでした。彼らの関心はこの世のことだけだったのです。永遠の満足についてなど彼らは考えようとしませんでした。

この世のことだけを考えている者たちに対比して、ダビデは15節で「しかし、私は、正しい訴えで、御顔を仰ぎ見、目ざめるとき、あなたの御姿に満ち足りるでしょう。」と言います。ダビデはこの世に幸せや満足を見出そうとする者とは違いました。彼はこの世のはかない楽しみよりも永遠に続く満足を、もっと言えばいつまでも変わらない満足の源である方を覚えていたのです。ここで彼は自分が「目ざめるとき、あなたの御姿に満ち足りるでしょう」と言っていました。聖書を見る時、「目ざめる」ということばは、もちろん眠りから目を覚ますという意味で用いられることもありますが、同時に、この「目ざめる」ということばは死からの復活という意味でも用いられます。例えばダニエル12：2では「地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者が目をさます。ある者は永遠のいのちに、ある者はそしりと永遠の忌みに。」と書かれています。ダビデがここで言わんとしたことは、ダビデは単にこの世のことだけにとらわれていたのではないということです。確かに彼は今の困難の中から、今の苦しみの中からの助けを主に求めていました。だからこそこの救いを与えることができるその方を唯一求めていたのです。でもダビデの関心はそれだけではなくて、それ以上にこの世での人生を終えた後どこに本当の満足があるのかということに心を留めていました。彼は死んで終わりだとは決して考えていなかったのです。そんな確信をダビデは持っていました。

この世が終わっても、死で終わりではない、これも私たち最近どこかで聞きませんでした？そう、まさに私たちが詩篇16：10-11で最後に見たことと同じです。そこにも「まことに、あなたは、私のたましいをよみに捨ておかず、あなたの聖徒に墓の穴をお見せにはなりません。あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。あなたの御前には喜びが満ち、あなたの右には、楽しみがとこしえにあります。」と言っていました。ダビデは今の苦しみの中であって、後にやって来る喜びに期待を置いていました。彼はいつの日にか主にお会いして、その御顔を仰ぎ見ることを楽しみにしていたのです。一時的な楽しみに心を奪われるのではなくて、いつまでも続くその満足を、その喜びをいつか自分は必ず手にするのだという確信を持っていました。だからこそ彼は今の苦しみの中にあっても、希望を失うことはなかったのです。そしてこの希望は、今の私たちにも同じように与えられているものです。ヨハネもこのように記していました。Iヨハネ3：2で「愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現れたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。」と。

ダビデはこの世のことではなく、その先を考えていました。私たちにも同じ希望、同じ約束が与えられているのです。もし私たちがこの約束を心から信じているのであれば、問題は今どのような歩みをしているかということです。この世のはかない一時的な楽しみを求めて今を生きているのでしょうか？この世のことだけに心がとらわれて、心をざわつかせ続けているのでしょうか？それとも主にあるいつまでも続く満足求めて、主に喜ばれるような者になること、主にお会いする日を楽しみにして日々を生き続けているのでしょうか？確かに主に忠実に生きて行くことには難しさも犠牲も伴います。多くの試練を経験することも、苦しむこともあるでしょう。でもそんな時はいつも神様を思い出すことです。私たちの歩みには公正な審判者である方が、あわれみ深い助け主である方がともにいてくださいます。そして最後には満足の源である方が私たちの歩みにふさわしい報いを用意してくださっているのです。ダビデはどんな状況の中にあろうとも、自分の神様が満足の源であるということを覚えていました。確かに彼は敵に苦しめられ、希望など見出すことができないような状況にありました。しかし、その中であって、彼はこの世のことに心をとられるのではなく、将来に対する希望に目を向けていたのです。神様がどんな存在かということ覚えてきたからこそ、彼は変わらずに満足を見出すことができました。

私たちも私たちの愛する神様がどのようなお方なのかということに心を留め続けることです。もしこの中にまだ神様に従っていくことよりも自分自身を満足させることを求めている方がおられるのであれば、きょうのみことばを自分のこととしてよく考えてください。確かにあなたは今自分自身を喜ばせ、楽しませてくれるものだけを欲して、それを求めているかもしれません。また、それによって一時的な楽しみや一時的な満足を覚えているかもしれません。しかし、聖書がはっきりと教えていることは、そのように神様に逆らって、神様以外のものを求めて歩んでいる者には必ず最後には正しい神様からのさばきがあるということです。公正な審判者である神様は、そのまま罪をよしとはされません。必ず正しい報いを与えられます。そしてこの方は私たちの外側だけではなく、内側をもご覧になっているのです。だからだれひとりとしてこの方の前に言い逃れをすることはできないということです。きょうもしこの主を知らない方がいるのであれば、この主の前に自分自身の罪を悔い改めて、この方の救いを求めてください。この方のうちのみ私たちのいのちが、私たちの本当の満足があります。この方を知って、この方のために歩む人生をきょうから始めてください。

詩篇17篇を通して、このようにして神様を覚えることによって、どのような状況の中にあっても祈り続けることができるとダビデは私たちに教えてくれました。さて、きょう私たちは祈りについて考えました。ダビデは祈りの人でした。信仰ゆえに迫害を受け、いのちの危険が迫ろうとも彼は変わることはありませんでした。それは変わらない神様をよく知っていたからです。確かに私たちにとって祈りというものが難しく感じることもあるかもしれません。鍵は、神様がどのようなお方をいつも覚えて祈りを捧げ続けることです。

○まとめ

最後にある人物の祈りを見たいと思います。その人物はあのマルティン・ルターです。宗教改革のきっかけとなる95カ条の論題を提示したルターもダビデと同じように信仰ゆえに大きな迫害を経験していました。彼はその当時絶大な権力を持っていたローマ・カトリック教会に対して、聖書の権威と正しい福音に立ち返るように求めました。そしてその結果、彼は時の教皇レオ10世と対立し、教会から破門されることになったのです。当時、破門されるということは事実上の死を意味していました。彼は自分の信仰ゆえに死が宣告されたのです。そんな破門された彼がその後にかかれたヴォルムス帝国議会というところに呼び出されます。この会議には大きな目的がありました。それはその場であって、ルターに彼の著書に記されている教えを撤回させることでした。もし自分がここで自説を撤回しなければ、そこに死があることを彼はよくわかっていました。その議が開かれる日の朝に、彼はこのように祈ったと記されています。「私の神よ。この世のあらゆる知恵や理屈に対して私の傍にいてください。どうか

あなたの御心が為されますように。私はこの混乱から抜け出して、平穏な日々を送ることをむしろ望んでいます。しかし主よ。あなたの御心が為されますように。それは正しく、また永遠のものです。どうか、私を支えてください。あなたは永遠に真実の神です。他の誰に私は信頼しましょう。傍にいてください神よ。あなたの愛するひとり子、私を守り、盾としていてくださるイエスキリストの名において、そうです、聖霊の力と権力を通して、あなたこそ私の力強いやぐらであられる方です。アーメン」と。ルターの信仰はどんな状況にあっても、たとえ死が間近に迫る中にあっても揺らぐことはありませんでした。その中にあっても彼は続けて祈ったのです。一体どうしてか——。それは彼が自分の信じている、自分の愛する神様がどのようなお方をよくわかっていたからでした。ルターも、パウロやシラスも、またダビデも、彼らはみな主がどのような方かを覚え、そしてこの方に祈り続けたのです。私たちも同じです。私たちもみことばを通して神様を学び、その学んだ神様に信頼を置き続けることです。どのようなお方を、どのような状況に置かれたとしても覚え続けることです。そのような者として、祈りの人として、ともに成長し続けていきましょう。